

趣味・教養型と社会参画型を融合させた学習機会の提供事業の研究

—松戸市の「ふるさと発見創造講座」を中心として—

清水 英男

はじめに

21世紀は、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』(knowledge-based society)の時代」¹⁾であるといわれている。

現在の我が国では、メガコンペティション(mega competition)が激化している中で、世界的な不況や内需の停滞などで混迷化している経済をはじめ、環境・エネルギー、医療などあらゆる分野で新戦略の構築や技術の開発、人材の育成など知識基盤社会に適切に対処することが求められている。

そして、人々がこれらグローバル化し複雑かつ錯綜している様々な現代的課題を解決しながら主体性をもって心豊かに生きるためには、必要に応じた知識・技術の習得を盛んにし、その学習の成果を生かして自分の幸せづくりや社会の形成者としての自覚を深め責任を持って役割を果たすなど公共の精神を発揮することが期待されている。

これらのことから、生涯学習の分野では、「各個人が、自らのニーズに基づき学習した成果を社会に還元し、社会全体の持続的な教育力の向上に貢献する」といった『知の循環型社会』²⁾の構築を目指している。

平成23年3月11日の東日本大震災(以下「大震災」という。)は、我が国における戦後最悪の災害をもたらした。その悲惨を極めた状況下で、被災した方々や救援・復興に携わった人々の言動が、世界で尊敬と信頼を得た。それは、思いやりやいたわり、支えあいや自制心、忍耐力や正義感などであり、本来、日本人が持っている豊かな心や行動規範などである。そして、これらのことが、今後の人々の生き方・あり方にかかわる貴重な教訓や示唆を与えてくれた。

今日の生涯学習行政の主要課題は、これらのことを踏まえ、厳しい経済状況を乗り越え新たな分野を切り開く知識・技術の創造や革新に携わる人材の育成と人々が自らの人生をより善く生きるための新たな価値観の形成と共有が醸成

できる学習環境を整備することといえよう。

ここでいう新たな価値観の形成と共有とは、人々が従来の生き方を見直し、大震災で顕在化された日本人の豊かな心や行動規範などを共有した新しい生き方・あり方を考え・実行することとする。そのためには、住民が主体となって行政と協働し、自立・共生・協働の精神を発揮した生涯学習による安心・安全な“まち(地域社会)”づくりを充実させ、人間としての“絆”を深める施策を構築することが必要である。この場合、“近代合理主義・効率主義”だけでなく“生きとし生けるものとの出来る限りの共生・共存”という考え方を具現化することも肝要といえよう。また、生き方・あり方を評価する指標としては、「国民総所得」GNI(Gross National Income)だけでなく、ブータン王国の「国民総幸福量」GNH(Gross National Happiness)をはじめ、我が国の「幸福度指標」などがあげられる。今後は、このような個人の幸福をはかる尺度と生涯学習・社会教育とのかかわりについての研究が必要といえよう。また、“まち(地域社会)”づくりでは生涯学習による“まち”や防災コミュニティづくりを、生活の仕方としてはワークシェアリングやスローライフなど、様々なことを模索することが肝要といえよう。

1) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像『第1章新時代の高等教育と社会』」(平成17年1月28日)

2) 中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～『第1部今後の生涯学習の振興方策について1. 生涯学習の振興の要請－高まる必要と重要性』」(平成20年2月19日)

これらのことを勘案し、今後の社会教育行政としては、人々が新しい生き方やあり方を模索するための学習や実践活動を支援する施策の構築が緊要な課題といえよう。また、厳しい行財政下にある地方公共団体では、学習機会の提供事業を、趣味・教養など心を豊かにする人格完成（個人の要望）型中心から現代的な課題でもある政策課題の解決や生涯学習ボランティアとして“まち（地域社会）”づくりに資するなど社会参画（社会の要請）型を重視する必要がある。

そして、人々が、そこでの学習の成果と人生経験で得た知識・技術や知恵などを生かして、社会貢献活動など社会の形成者としての役割を果たす活動を支援することが求められている。

その一環として、学習に関する趣味を豊かにし教養を高めるなど個人の要望と地域活動やボランティア活動など社会の要請の両方を満たす学習機会の提供事業の創造が喫緊の課題となっている。

1. 研究の目的

本研究の目的は、人々がこのような日本人の豊かな心と相手の立場に立った行動規範などを顕在化させ社会貢献活動を盛んにすることを狙いとした学習機会の提供事業を無理なく推進するための方策を提言することとした。筆者は、その一方策として、公教育としての教育の目的（教育基本法第1条）の達成を目指す人格の完成と社会の形成者として必要な学習の両方を融合した学習機会の提供事業（以下「参画型学習事業」という。）の研究を継続して行っている。

なお、ここでいう参画型学習事業とは、成人が興味・関心を持っている地域の自然・環境・歴史・文化など趣味・教養に関する分野の学習や研究を盛んに行い、その成果を活用し、継続的に研究対象を保全し啓発する活動や市民を対象にした学習機会を提供するなど社会貢献活動に結び付くことを狙いとした学習機会の提供事業とする。

2. 研究の対象事例

本研究の主な対象事例は、平成24年度に千葉県松戸市公民館が主催した「ふるさと発見創造講座（以下『創造講座』という。）」である。この創造講座の前身は、平成13年度にスタートしてから平成23年度まで開設されていた「まつど生涯学習大学講座専攻科（以下『専攻科』という。）」であった。平成16年度からの専攻科は、「自分たちの“まち”は自らの手づくり育てる」という理念を掲げていた。また、活動内容・方法は、受講生が自ら興味・関心をもった地域の自然・環境・歴史など様々な分

野の学習・研究活動に積極的に取り組むこととしていた。受講後は、各班単位で更に自発的な学習・研究活動をすすめ、そこで得た学習の成果を生かしながら、市民を対象にした学習機会の提供事業を実施することを期待していたのであった。

このような参画型学習事業であった専攻科を、PDCAサイクルなどに基づいて平成16年度から平成23年度にわたって総合的な点検・評価を行い、様々な課題を発見・改善し発展させたのが創造講座である。

つまり、この創造講座の企画・運営・評価などは、専攻科の調査・研究の成果を生かしてつくられているのである。

なお、松戸市の概要をはじめ、まつど生涯学習大学講座や専攻科などの概要については、筆者の論文³⁾を参照されたい。

3. 継続研究の概要

筆者は、参画型学習事業に関する実証的な研究を、平成16年度から平成24年度の今日まで、約9年間にわたって継続的に行ってきた。それは、この約9年間、参画型学習事業と位置づけた専攻科と創造講座に関する学習プログラムの作成など企画・運営・評価に携わるとともに、実践面では各年度を通して主任講師を務めてきたからである。

この専攻科では、平成16年度から平成23年度までの8年間で19の調査・研究班（グループ）が結成された。現在、それらの班の中で9グループが事後活動を行っている。

なお、専攻科を参画型学習事業の研究対象として行ってきた8年間にわたる継続研究の結果の概要については、以下の通りである。なお、詳細については、筆者の論文⁴⁾を参照されたい。

(1) 研究の概要

① 研究の目的

市民の学習に関する意識・行動や専攻科受講生の実践活動による成果と課題を的確に把握する。それらを基礎資料として、専攻科の企画・運営・評価など全般にわたり改善し実践（PDCA）しながら、専攻科がより一層参画型学習事業となるための方策を明らかにする。

3) 清水英男著「創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業に関する一考察（pp.9-41）」（聖徳大学生涯学習研究所紀要第5号，平成18年3月）

4) 清水英男著「創年の社会参画型学習機会の提供事業に関する研究（pp.13-23）」（聖徳大学生涯学習研究所紀要第7号，平成21年3月）

②調査（基礎資料づくり）

年度毎に受講生と班長へのアンケート調査や聞き取り調査などを実施した。なお、各年度とも受講対象は、まつど生涯学習大学講座の修了生であり、定員は30人であった。

(2)研究結果の概要

年度毎に実施した各種の調査結果をはじめ、専攻科の成果や課題を明らかにし、学習プログラムの改善など実証的な研究を行ってきた。平成16年度から平成23年度までの8年間にわたる継続研究の結果に基づいた主な提言の概要は、以下の通りである。

- ① 受講対象者を専攻科修了生だけでなく、テーマに興味・関心のある市民を含めること。
- ② 学習プログラムとして、2年間の継続型から単年度で3学期制とすること。
- ③ 班別の調査・研究活動がフルシーズン実施できるよう年度早期の開設とすること。
- ④ 事後活動や班活動が効果的に行われるよう、専攻科修了生で現在活躍しているグループの代表(旧班長)の講義と実際の活動を体験できるようにすること。
- ⑤ 「呼吸する学習プログラム」を開発し試行した結果、参画型学習事業では有効との結論に至ったので、班別活動等で導入すること。
- ⑥ 班編成については、仮班を編成し、現地調査を含めた仮班活動に多くの時間(4回程度)をとること。受講生には、希望した仮班活動への参画や他の仮班の活動実績を確認することができるようにすること。そのうえで、受講生が納得して正式班の班員となることができるように配慮すること。
- ⑦ 主催者と受講生、受講生同士が相互理解を深め、目的意識や仲間意識を高めながら効果的な班運営ができるよう、その軸となる班長と副班長を置くこと。
- ⑧ 各班員のよさをお互いが認め、助け合い、支えあう和やかな班運営と全班員が役割を持ち主体的に活躍できる班となるように努めること。

4. 研究の方法

研究の方法としては、研究の目的を達成するために次のことを行った。まず、参画型学習事業の学習プログラムについては、現在までの継続研究の課題と成果を生かす視点を創造講座策定のプロセスを通して明らかにすることとした。その理由は、この創造講座が平成16年度から実施してきた専攻科の8年間の成果や課題の解決策を踏まえて改善したからである。つまり、従来からの研究成果の集大成と

いえる参画型学習事業として企画し運営・評価しているからである。

次に、参画型学習事業の重要な分野である創造講座の現状や班運営については、現在活躍している班長や班員へのアンケート調査や聞き取り調査を実施した。また、事後活動のあり方については、現在事後活動を実施している班(グループ)の代表(班長)を対象とした聞き取り調査を行った。

それらの調査票は以下の通りであるが、詳細については本論文(7, 8, 9)を参照されたい。

- ① 専攻科調査・研究班の事後活動の現状と課題に関する旧班長の意識・行動調査票(聞き取り調査)
- ② 平成24年度ふるさと発見創造講座(専攻科)の学習に関する会員の意識・行動調査票(アンケートと9名の受講生への聞き取り調査)
- ③ 平成24年度ふるさと発見創造講座(専攻科)における班長の感想・提言調査票(アンケートと聞き取り調査)

5. 平成24年度ふるさと発見創造講座事業策定上の視点

この参画型学習事業である創造講座の事業策定上の視点と現状については、以下の通りである。

(1)応募・広報活動について

①異年齢による班活動が可能となる受講対象者層の拡充

創造講座の受講対象者は、従前のように、まつど生涯学習大学講座修了生のみでなく、中高年齢層で自己を磨き社会参画を志す創年も新たに対象とした。つまり、自らの意思で学習活動を行い、その成果を自らの“幸せ”づくりや“まち”づくりに結びつけようと考えている成人男女も受講対象ということである。

その主な理由は、創造講座の調査・研究活動や講座終了後に活動を継続して行うためには、40代から50代の年齢の方々も参画している異年齢の班が必要と判断したからである。例えば、従来の受講生は、各年度とも、平均年齢が約70歳となっていた。そして、受講終了後に班活動を行っている6グループのリーダーは、「会員の高齢化が進み活動が年々消極的になってしまう。」と述べている。

その結果、今回の創造講座の30人の受講生(女性13人、男性17人)の平均年齢は66.89才となり、従前の専攻科より3歳程度若返った。

②受講生の学習活動がわかる広報活動の充実

広く市民を対象として、創造講座の開催案内を松戸市の広報誌に掲載するとともに公民館のホームページなどでの

広報を行った。また、創造講座の主たる対象者であるまつど生涯学習大学講座の修了生は、この生涯学習大学講座の一コマとして、平成23年度の専攻科の班活動の成果と課題を発表するなど学習内容・方法を紹介した。具体的には、講演テーマ「いきいきまつどの元気人!!～1年のまとめ～地域を生涯活躍の場に」の中、各班の活動をパワーポイントやプリントを使用して発表した。また、当日、その会場で班員が調査・研究をまとめた資料の展示を行った。さらに、修了生の班（グループ）が事後活動として継続している調査・研究の成果を生かして（公民館から採択されて）実施している自主企画講座への市民の参画や広報などである。

その結果、応募は、昨年度の17人を超え49人となった。今回は、この応募者の中から抽選により定員の30人を選出しスタートした。応募者の内訳は、公民館に葉書で応募のあったのが20人、残り29人（59.2%）は平成23年度専攻科の受講生の体験発表と講演の直後に応募したのである。

③早期募集と早期開設

創造講座の開設期間は単年度とし、当該年度のできるだけ早い時期にスタートすることとした。その理由は、四季にかかわる自然観察や年中行事などの班別による調査・研究活動を年度内で完了したいからである。

そのため、応募期間や開設日を早くすることに努めた。しかし、この創造講座が単年度事業であることや体系化した学習プログラムの影響で、今回も、開講式は昨年度より10日しか早くならず、班別の調査・研究活動時期が6月以降になってしまった。

(2)学習プログラムの内容・方法について

①受講生の変容に応える呼吸する学習プログラムの導入

創造講座の学習プログラムは、従来の専攻科で成果をあげている呼吸する学習プログラムを導入した。その理由は、受講生の学習の興味・関心や変容に応じて学習プログラムの再編成が明確に行えるからである。本年度も、班別活動が進展する中で、受講生の興味・関心の度合いや探求する程度が深化している。その度に研究テーマを変更したり講座の内容・方法などを改変したりして実施している。

②単年度3学期制とした学習プログラムの編成

創造講座の学習プログラムは、単年度を3学期に分け、1年間で完結する方式を採用した。開設当初の第1学期は、全員が仲間意識を高め、共通に学ぶ基本的な内容と班別の研究テーマを設定するまでとした。具体的には、「生涯学習と“まち（地域社会）”づくりの意義」と「生涯学習ボランティアの役割」などの講義や「ワークショップのすすめ方」などの演習との整合性をもたせた内容・方法

とした。また、仮の班を編成し仮研究テーマを設定できるよう、班活動や現地での調査・研究活動などの理解に十分な時間をかけた。さらに、これら仮研究テーマを全体会で協議し正式な班の研究テーマを設定し、受講生が希望する学習研究活動ができるよう、再度班編成を行った。

第2学期は、班別の学習研究活動のスタートから終了までとした。そこでは、各班の班員が満足できるよう班毎に現地調査や研究の時間を設定できる呼吸するプログラムを活用することとした。その結果、各班は、調査・研究活動や学習活動の回数増や1回あたりの時間の増減、講師の選定などについて、班員の合意で改善している。また、班長は、班活動を効果的に行うため、全班員が自らの長所を生かした役割を担当し責任を持って遂行できるような配慮を行うなど班経営に努めている。

第3学期は、班別活動での学習と調査・研究の成果を生かして市民を対象とした自主企画講座の企画・運営・評価を行うことと、本年度の成果を纏めて全体会などで発表し、これらの成果を全員が共有できるところまでとした。つまり、3学期は、受講生が創造講座終了後自主グループ結成に必要な内容・方法としたのである。

③班別活動を事前に体験できる学習プログラムの導入

昨年度まで開設していた専攻科の募集案内には、受講生自らが班を編成して“地域のよさを発見し・学び・まとめ・広く市民に知らせる”活動を行うことを明示している。しかし、毎年度、受講生の中には、この能動型学習についての理解が十分でなく、回数を重ねる中で辞退する人がいるのである。

そこで、今回の創造講座では、班活動や現地での調査・研究活動などの理解に十分な時間をかけた。具体的には、受講生ができるだけ早く班活動の体験ができる学習プログラムを新たに導入し、4回にわたって実施した。その内容は、先ず、専攻科修了生でグループを編成して活動している代表の方々の自らの専攻科内での学習体験と事後活動の事例の発表である。その後、発表したグループが主催し受講生が全員参画する自然散策などの実践活動を行ったのである。

④受講生が納得できる班編成と研究テーマづくり

今回の創造講座では、受講生自らが希望するテーマを設定し調査・研究活動に積極的に参画できるようにした。例えば、学習プログラムに専攻科修了者の事後活動の発表と受講生が参画する実践活動を導入するなど受講生が班活動を間接的に体験できるようにした。また、専攻科終了者のグループの代表者との情報交換や仮班での仮研究テーマによる調査・研究の実施回数を増やしたことなどである。

その結果、当初は、3人が事後活動の事例を発表し

たグループへの参画を希望していたが、最終的には仮班に所属した。残り27人は、仮班を編成した。その後、全員が三つの仮班に所属し仮テーマで調査・研究活動を行った。そして、それら3班だけが正式な班となった。

このことは、事後活動グループへの加入を含めて5班程度が編成されると予測していたが、意外な結果となった。

しかし、この班編成の過程に時間をかけたので、班活動での欠席も少ないなど、自らがつくった研究テーマと班という自覚と責任が醸成されているように見受けられた。

⑤班別研究分野の受講後の選択

班別で学習・研究する分野の選択は、従来から行っていた「受講申し込み時点での実施」を見送った。それは、環境や歴史、文化など修了生の事後活動の6グループの事例発表と体験活動の受講後に、受講生が自ら興味・関心のある学習・研究分野を選択することが、より効果的と考えたからである。

6. 平成24年度新設「ふるさと発見創造講座」の概要

この創造講座は、平成16度から平成23年度まで開設されていた専攻科に関する研究の成果を集大成した参画型学習事業である。つまり、創造講座は、この8年間にわたって研究し改善してきた参画型学習事業である。その概要は、以下の通りである。

(1) 目的

松戸市には、美しい自然をはじめ魅力ある歴史や文化があり、豊かな風土が息づいている。この創造講座は、それら松戸の自然・歴史・文化に関して、同じような分野に関心のある受講生で班を編成しテーマを設定する。そのテーマに基づいた調査・研究を行い、受講生の視点でまとめるのである。

その調査・研究の成果を、市民対象の自主企画講座として開設することやまとめた資料を公開するなどして市民に還元する。また、各班が講座終了後も班活動を継続し発展させるための企画・運営・評価の学習や演習も行うこととした。特に、以下2点に留意した。

- ①学びや調査・研究したことを生かして地域で活動する
方策の立案
- ②既存の自主企画団体（専攻科修了生の事後活動）の
活性化

(2) 内容・方法

受講者がグループをつくり、自ら松戸の良いところを発見し、その魅力を自分たちの視点でアピールする方策を考

える。調査・研究後、松戸市民に広く伝えるための自主企画講座を開催する。

(3) 対象

- ①市内在住の人
- ②まつど生涯学習大学講座を修了した市民と受講中の市民

(4) 定員

30人（原則として、通年で参加できる市民）

(5) 会場

松戸市文化ホール4階活動室等

(6) 標準的な開催期間・曜日・時間

標準的な開設期間は、平成24年5月16日から平成25年3月6日までの30回（30日間）とする。開設曜日と時間は、水曜日、10時00分～12時00分である。但し、班別活動については、各班の実情に応じて実施回数増を認める。

(7) 学習プログラム・日程

（図1参照）

(8) 班の編成状況

受講生が仮班をつくり仮調査・研究テーマに基づき現地調査と協議を繰り返した。それらの成果を全体会で発表した後で、3班が正式に編成され、全員が希望する班に所属した。その班名（調査・研究テーマ）は、以下の通りである。

- ①「牧」を調べる会（テーマ「松戸の野馬」）
- ②石仏等を見て歩く会（テーマ「松戸の石仏と石碑」）
- ③駅近楽しみ発見隊（テーマ「駅近くの自然散策」）

(9) 創造講座運営に関する留意事項

創造講座の開講式時に、以下のことを受講生に留意事項として伝え実践している。

- ①現地調査は、標準回数を例示している。各班の必要に応じて増減できる。
- ②第6回の班への所属は、仮の編成とする。各班のテーマが決定された後（9回目）に、再度班を選択して所属班を決定する。
- ③班別研究活動の研究内容・学習内容は、班員の意識・行動や興味・関心の変化や高まり、研究の焦点化などに応じて柔軟に変更できる。講師・助言者は、各班の研究・学習内容に即して再度選択できる。

図1 平成24年度「ふるさと発見創造講座」日程

日 程	内 容
5/16 (全体会)	開校式・オリエンテーション 基調講演:生涯学習ボランティアと“まち(地域社会)”づくり～先達とともに学びあい、松戸の威力を発見し市民に伝えるヒントを考える
5/23 (全体会)	講演:グループ活動を継続している専攻科修了生に聞く(江戸川研究会/緑のガイド隊/水戸道中膝栗毛) (調査・研究の内容と現在の活動状況の説明。次回これらのグループによる現地散策へ参加するコースを受講生が選択し決定する。)
5/30 (現地散策)	コースA 鮮魚街道を歩く コースB 緑のガイド コースC 古き松戸を訪ねて
6/6 (全体会)	講演:グループ活動を継続している専攻科修了生に聞く(松戸を知ろう会/坂川を歩こう会/樹の会) (調査・研究の内容と現在の活動状況の説明。次回これらのグループによる現地散策へ参加するコースを受講生が選択し決定する。)
6/13 (現地散策)	コースA 上本郷の七不思議を回ろう コースB 坂川の変遷を追って コースC 松戸の樹を訪ねる散歩
6/20 (全体会)	協議・講義:研究テーマ(仮)を話し合う (講義・演習:ワークショップによる調査・研究プログラムづくり) 演習:グループづくり①(仮班づくり)
6/27 (全体会)	講義・演習:グループづくり②(講義:グループに必要な機能とリーダーシップ) 協議:研究テーマ(仮)の決定
7/4 (現地調査)	研究テーマ(仮)の検証
7/11 (全体会)	協議:各仮班の研究テーマ(仮)を発表し、全員が再度希望する仮班に参画する。その後、仮班での協議を経て、正式な班名前や研究テーマ、連絡網や役割分担、調査・研究プログラムなどを決定する。
8月～9月	班ごとの実情に応じて、フィールドワークなどの現地調査や文献調査などを行う。
9/5 (全体会)	協議:班別調査・研究活動の経過報告
9/12	班別調査・研究活動
9/19	班別調査・研究活動
9/26	班別調査・研究活動
10/3 (班長会議)	班別調査・研究活動(班長会議:班活動の問題点や解決策等を話し合う)
10/10	班別研究活動
10/17	班別研究活動
10/24	班別研究活動
10/31	班別研究活動
11/7 (全体会)(班長会議)	協議:各班の調査・研究内容の概略の発表と質疑・応答、提言 講義:学びの成果を生かすために
11/14 (全体会)	講義・協議:松戸の魅力を伝える講座を企画する①(講義・演習:ワークショップによる学習プログラムづくり～学びの成果を生かす「自主企画講座」開設のために)
11/21	協議:松戸の魅力を伝える講座を企画する②
11/28 (全体会)	協議:松戸の魅力を伝える講座を企画する③
12/5	協議:自主企画講座内容の決定 (※1月15日号の広報で自主企画講座の募集を行う)
12/12	協議:講座実施に向けての準備①
1/16	協議:講座実施に向けての準備②
1/23	協議:講座実施に向けての準備③
1/30 (全体会)	協議・演習:講座実施に向けての準備④(演習:講座に関するアドバイス)
2/6, 13, 20	それぞれの班で「自主企画講座」を実施する。
3/6 (全体会)	・閉校式 ・講評 ・報告書提出・振り返りと今後の活動に向けての準備など

注意1:上記日程は、変更することもある。

注意2:班別活動の日程は、班ごとに決めることができる。

注意3:2月に実施する自主企画講座については、既存団体の協力を得ても合同で実施してもよい。

また、特に必要があれば、外部講師など班員以外の人の協力を得ることも可能である。

- ④各班に班長、副班長（各1名）を置く。班長は、班を運営する。また、必要に応じて主任講師や公民館（主催者）と運営等について協議を行う。

7. 調査「調査・研究班の事後活動の現状と課題」

(1) 調査の概要

①調査の目的

本調査は、専攻科修了生の事後活動の活性化と創造講座の調査・研究班の事後活動を行うための学習内容や方法の改善に資す基礎資料を得ること。

②調査の対象

平成24年度創造講座で事後活動の発表と受講生を対象とした体験活動を実施したグループ（班）の代表6人

③調査方法

聞き取り調査

④調査実施期間

平成24年5月23日から平成24年6月14日

⑤調査内容

以下の「(2) 調査結果の概要」による

⑥回収結果（回収率）

4人（66.7%）

(2) 調査結果の概要

平成16年度から23年度までの専攻科で組織した班は19班であったが、平成24年4月17日現在、事後活動を続けている班（以下「事後班」という。）は9班（47.4%）であった。

①事後班の活動内容

事後活動を行っている9班の主な活動内容は、会員のみでの月例勉強会や調査研究などの研究・学習活動が3班、市民を対象として事後班が開催した公民館自主企画講座や発表会及びイベント活動が各6班であった。

②会員の人間関係・会員数（集団維持機能）

各事後班とも、全員が良好な人間関係にあった。また、昼食会など親睦を図っていた。しかし、会員の高齢化がすすみ、また、病気などで退会者もでてきていることなどから、会員が減少している。

③事後班活動の取り組み状況（目的達成機能）

各事後班とも会員同士での活発な意見交換が行われていることがわかった。具体的には、「イベントを行うときには全員合意するのに時間がかかるが事後活動がスムーズに行われる。(2人)」、「全員がチームとしてのまとまりの大切さを理解しており、役割を果たしている。(3人)」、「特定の会員に負担がかかりすぎており、全員の参画が得られない。(1人)」ということであった。

④代表（班長）として努力したこと

代表として努力していることは、全員が「専攻科での班長の時と同じく会員の好ましい人間関係づくり(6人)」であった。また、「会員の得意分野を生かした役割分担(3人)」や「公民館や他団体との情報交換と協力関係づくり(2人)」であった。

⑤代表（班長）としての現在の心境

全員が「専攻科終了直後は班（グループ）を運営できるか心配であったが、現在は会員との好ましい人間関係の中で、充実した活動ができており、努力のしがいがあった。」と思っている。しかし、2人は「会員が固定化されてしまい、病気などで退会する人もあり、今後の事後班の存続が危ぶまれる」と心配している。

8. 調査「創造講座の調査・研究班活動の現状と課題」

(1) 調査の概要

①調査の目的

本調査は、参画型学習事業である創造講座の学習内容・方法及び調査・研究班の組織と内容・方法など学習プログラム全般の改善に資する基礎資料を得ることを狙いとした。

②調査の対象

創造講座の班長3人及び班員30人

③調査方法

アンケート調査及び聞き取り調査

④調査実施期間

前期調査（平成24年11月7日と14日に実施）

なお、今後、後期調査（平成25年3月）も実施する予定である。

⑤調査内容

以下の「(2) 調査結果の概要」による

⑥回収結果（回収率）

班長2人（66.7%）、班員24人（80.0%）

(2) 受講生の意識・行動に関する調査結果の概要

①属性・平均年齢

本年度開設した創造講座の受講生は抽選で定員の30人とした。その内訳は、女性13人男性17人であり平均年齢66.89才であった。平成18年11月の調査（以下「前回調査」という。）では、全受講生22人のうち女性は5人であり、男性が17人（77.3%）と圧倒的に男性が多数を占めていた。また、平均年齢は70.1歳であった。

②応募方法と受講動機

今回の創造講座受講生に関する調査（以下「今回調査」という。）では、前述（5の（1）の①）の通り、約6割の

受講生が生涯学習大学講座修了生であった。この大学講座と関係がない受講生は約4割であった。そして、全員が「自らの意思で応募した。」と答えている。つまり、受講生は、「松戸の良さを発見し、学び、磨き、広める」といった郷土に愛着をもち、社会貢献活動に積極的な参画意識を持った学習者といえよう。

③地域活動への参画の状況と参画意欲

ボランティア活動やグループ活動など地域活動への参画状況については、受講生の10人が「現在行っている。(41.7%)」、5人が「過去に行ったことがある。(20.8%)」、9人が「行ったことがない。(37.5%)」と答えている。つまり、受講生の約6割が地域活動に参画した経験があり、約4割が経験していないということである。この「経験していない」9人の受講生の理由は、「活動の内容がわからなかった(5人)」と「忙しかったから(3人)」、「興味がなかった(1人)」であった。

「今後地域活動に参画したい」と回答した受講生は、87.5%〔ぜひ参画したい7人(29.2%)、機会があれば参画したい14人(58.3%)を含む。〕であり、「なんともいえない」1人と「無回答」が2人であった。

つまり、受講生の約6割が地域活動の経験を有し、約9割強が今後とも参画する意欲を持っていることがわかった。

④参画したい地域活動(複数回答)

今回調査によると、参画したい地域活動の第1位は「ふるさとのおよさ(自然・歴史・文化など)を学び・磨き・市民に伝える活動(58.3%)」であり、第2位は「環境保全に関する活動(25.0%)」であった。第3位は「公共施設に関する活動」と「体育・スポーツ・文化に関する活動」と「自主防災活動や災害救護に関する活動」の16.6%であった。

前回調査では、第1位が「環境保全に関する活動(61.5%)」であり、第2位が「社会福祉に関する活動(38.5%)」、第3位が「体育・スポーツ・文化に関する活動」、「青少年の健全育成」、「市民の学習支援(23.1%)」であった。

このことから、創造講座の受講生は、創造講座の目的を的確に把握し、地域活動に関する学習成果を生かした社会貢献活動への参画を求めているといえよう。

⑤創造講座で学習をする理由

この創造講座で学んでいる理由として、第1位が「趣味の充実(41.7%)」であった。第2位が「教養を高める(20.8%)」と「自分の可能性を高める(20.8%)」と答え、次が「地域社会に役立つ活動を行う(16.7%)」であった。

前回調査結果では、第1位が「自分の可能性を探るため(37.5%)」であった。第2位が「教養を高めるため(25.0%)」、第3位(18.8%)が「地域社会に役立つ活動を行うため」と

「趣味を充実するため」であった。

このことから、今回の前期調査の時点で受講生が学習を継続している主な理由は、趣味・教養と自分の可能性を高めることといえよう。

⑥創造講座の学習内容・方法の有効度(複数回答)

今回調査では、95.8%が「創造講座の学習は役に立っている〔『非常に役に立っている(62.5%)』、『ある程度役に立っている(33.3%)』を含む。〕」と答えている。また、「役に立っていない〔『あまり役に立っていない。』と『まったく役に立っていない。』を含む。〕」と回答した受講生は、0%であった。

前回調査では、93.7%が「専攻科の学習が役に立っている〔『非常に役に立っている(24.0%)』、『ある程度役に立っている(68.7%)』を含む。〕」と回答していた。

今回調査では、役に立った学習として、第1位が「班別による課題発見・解決型の学習(50.0%)」であり、第2位が「専攻科修了生のグループによる現地体験学習(37.5%)」、第3位が「生涯学習の理論(29.2%)」、第4位が「グループ活動の理論とリーダーシップ(20.8%)」であった。

前回調査結果では第1位が「集団での意思決定の技法(56.3%)」であり、第2位は「生涯学習の理論」と「班による課題発見・解決型の学習」いずれも37.5%であった。第4位が「グループ活動の理論とリーダーシップ(31.3%)」であった。

これらのことから、創造講座の受講生は、「班別活動に対応できる学習内容・方法や技法が役に立っている。」と考えていることが理解できた。

⑦創造講座の問題点や改善点(記述)

班編成・班活動に関する問題点としては、「班員の考え方が異なりまとまりにくかった(3人)」という反面、「少人数の班編成で活動には全員が参加できていてよかった。(2人)」、「昼食会など親睦を深めながら、楽しい班活動ができてきている。(2人)」という感想があった。また、学習プログラムの改善点としては、「開講期間を4月から8月までとし、月4～5回実施し、暑い時期(夏)の現地調査をさける。(1人)」ことや「歴史に関する基本的な考え方をまなびたい。(1人)」など開講期間や学習内容に関する提言があった。

(3)班長の意識・行動に関する調査結果の概要

今回の創造講座でも、各班に班長1名を配置した。役割は、班員を掌握し班活動を円滑で効果的に行うことである。また、司会係、発表係、記録係、渉外係などの設置は、各班の裁量とした。なお、従来どおり、受講生全員が対等な関係で学習や研究活動に参画することを原則とした。

今回の班長を対象とした調査(以下「班長調査」という。)

は、全班長（3人）の中から2人に聞き取り調査やアンケート調査を実施した。また調査期間は、創造講座の初期（平成24年6月20日から7月11日の全体会とした。）と中期（平成24年9月5日から11月7日までの現地での調査研究とした。）である。その後、終期（平成24年11月14日から平成25年3月6日までの自主企画講座の企画から閉講式までとした。）までの後期調査を平成25年3月に予定している。

この班長調査の結果からは、班長全員が「班長になって得ることが多く自分のよい勉強になった。」旨の答えがあった。また、創造講座の講義や演習等の評価や班編成上の問題点をはじめ、班の結成から活動期にかけての集団維持機能や目的達成機能の状況、役員のかかわり方などについて、貴重な意見や提言などを得ることができた。

①学習内容・方法の有効度（複数回答）

今回の班長調査では、全員（2人）が「創造講座の学習が非常に役に立っていると回答している。また、役に立った学習として、「集団による意思決定（2人）」と「グループ活動の理論とリーダーシップ（2人）」、「専攻科修了生のグループ活動（2人）」と「専攻科修了生のグループ活動による現地体験学習（2人）」をあげている。次に、「班別による課題解決型学習の技法（1人）」であった。

このことから、班長も受講生同様班別活動に対応できる幅広い学習内容や方法が役立っていると考えていることが理解できた。

なお、「役立たなかった」という学習項目をあげた班長はいなかった。

②班員の人間関係（集団維持）づくり（複数回答）

人間関係については、初期（5月から7月まで）では2班とも、班員の相互理解が十分でないことや価値観などの違いなどにより遠慮がちで消極的な傾向にあった。そして、欠席や辞める受講生もいて、班長が好ましい人間関係づくりに努力していることがわかった。

中期（8月から11月）になると、2班共に班活動の目的意識が明確になり、現地調査や昼食会などを行うにしたがって、班員相互の理解も深まり、協調的な関係の中で調査・研究活動（目的達成）への取り組みも積極的になってきていることが理解できた。

このことは、平成20年11月での班長に対する調査結果（以下「20年班長調査」4）という。）と同じであった。

班長が、好ましい人間関係づくりをすすめるにあたって問題と考えたことは、以下のようなことであった。

前期では、「テーマなどの協議で、否定的な発言をする班員や自分の提案以外は賛同しない班員がいた。」また、「発言をほとんどしない班員がいた。」ことなどであった。

中期では、「協議日や現地での調査・研究日に事前連絡なしで欠席する班員がいた。」ことや「現地調査などの集団行動でも遅刻などルールを守らない班員がいた。」ことなどであった。

班長が、班の好ましい人間関係づくり（集団維持）としてリーダーシップを発揮した主なことは、以下のものであった。

前期では、「班員同士が仲間意識を早く持つように、グループワーク時には名前を呼び合うようにした。」ことや「早く各班員のおよさと気質などを理解し、適切な役割分担に努力した。」ことなどであった。また、「班員意識を高めるよう昼食会など親睦を深める機会をつくった。」ことや「班員全員が自分の意見を気軽に言えるよう、雰囲気づくりに努力した。」ことなどであった。

中期では、「班員が気軽に意見交換ができるようコミュニケーションづくりに力を入れた。」ことなどである。

このことから、20年班長調査同様、班長の対応によって班の人間関係が左右されることがわかった。また、今回の班長調査でも、班長の努力が、仲間づくり（集団維持）に役立っていることがわかった。

③班の調査・研究活動（目的達成）について

班別活動の初期では、2班とも「テーマの設定ができない。また、全員共通のイメージがもてない。」という状況であった。しかし、中期になると、各班とも「話し合いをしていくうちに研究テーマが決定し、調査・研究の方向が見えてきた。そして、班員同士の親睦の機会もあり、仲間意識が深まり、協力して現地調査に取り組んでいる。」ということであった。

この期間を通して、班長が目的達成に努力したことは、以下のようなことであった。

前期では、「ワークショップで体験したコンセンサス法によって、全員が共通理解を前提とした班活動の意思決定になじめるよう努力した。」ことや「調査・研究テーマの設定時には、話し合いの場で全員が発言できるよう、許容的な雰囲気をつくり、全員の意思で決定した。」ことなどであった。

中期では、「全班員が調査・研究の目的や計画の共通理解を深め、欠席者がいても対応できるようにした。」ことや「現地での調査・研究活動では1回ごとに調査先の担当者や会計など役割を決め、全員が役割を果たすように配慮した。」「現地での調査・研究活動に全員が参画できるように、大変だったが日程調整を行った。」ことなどである。

このことから、創造講座も、20年班長調査結果と同様に、班別による目的達成活動は班活動がすすむにしたがって好ましい状況がつけられていることがわかった。

④創造講座終了後のグループ結成の可能性について

創造講座終了後のグループ結成については、「大いに期待できる」と「期待できる」が各1人となった。その中で終了後のグループでの研究は、「現在の研究テーマを続けたい。」と「新たな研究テーマで行う。」とに分かれた。前者の理由は、「現地調査が7月からはじまったので、通年の調査をしたい。」であり、後者は、「良い仲間恵まれたので、学習の縁を継続したい。」とのことであった。

これらのことは、創造講座の初期と中期を対象とした前期の調査(平成24年11月7日と平成24年11月14日に実施)時点の結果である。この前期調査時点では、9回のプログラムが実施されていない状況である。今後、各班は、最後の調査と自主企画講座の企画・運営・評価や研究資料のまとめのために、残された9回以上の回数と時間をかける予定である。したがって、この質問は、創造講座終了直前に再度行うこととしている。

9. 趣味・教養型と社会参画型を融合させた学習機会の提供事業のあり方

この参画型学習事業の特徴は、市民が地域の興味・関心を持っている分野での学習活動からスタートし、終了後もグループによる調査・研究を続け、そこで得た成果を広く市民に提供する活動を展開することにある。

ここでの参画型学習事業の望ましいあり方に関する提言は、筆者が9年にわたる松戸市公民館本部が開設している「まつど生涯学習大学講座」の専攻科を対象に研究した成果を生かして平成24年度に開設した「創造講座」の調査結果の分析などから導き出したことである。従って、前述した「5. 平成24年度ふるさと発見創造講座事業策定上の視点」と重複する箇所もある。

(1)参画型学習事業の応募・広報に関する提言

①参画型学習事業の目的に賛同した幅広い受講層の確保

応募対象者については、専攻科では生涯学習大学講座の修了生としていた。しかし、今回の創造講座では、創造講座の目的に賛同する市民も対象者とした。その結果、女性が多くなり、また、修了生以外の応募者が18人おり、全体として応募者が昨年度に比べて32人増加した。さらに、受講生の平均年齢が若くなり、初期の段階から班活動が活発になった。

参画型学習事業は、自らの考えや行動に責任が持てる行動的な成人を受講対象とし、フットワークのよい異年齢・異性による学習・研究集団となることが望ましい。そして、これらの受講生の中に、生涯学習による“まち(地域社会)”

づくりにかかわる学習や社会貢献にかかわる実践活動の経験者がいると効果的である。なお、ここでいう行動的とは、身体的なものではなく、創造講座の学習や調査・研究活動への旺盛な意欲と情熱(やる気)の持ち主とする。

②受講時の活動がイメージできる広報活動の充実

広報活動は、市役所や生涯学習施設など地方公共団体の広報媒体を活用することが極めて効果的である。この場合は、これらの広報媒体の限られた枠を有効に活用して受講生の学習活動がわかる内容にする必要がある。例えば、地方公共団体や教育機関の広報誌やホームページなどの広報媒体を活用し、その参画型学習事業の概要のほかに、受講生の様子がよくわかるなど応募者が間接体験できるような工夫が肝要といえよう。

今回調査から、受講生や修了生が主体となって企画・運営し市民が直接体験できる活動を盛んにすることは、応募者増に結びつくことが理解できた。そのため、社会参画型学習事業では、受講生が主体となって意欲的に学習し調査・研究することができるよう、学習の要望や要請の把握と講座内容の質的充実が大切といえよう。また、修了生の事後活動を積極的に支援することも広報活動としても効果的といえよう。

③募集は前年度末とし単年度で当該年度早期の開設

今回調査では、多くの班員も班長も「春夏秋冬を通して調査・研究がしたい。」旨の提言があった。このような1年間を通した開設期間の設定は、郷土の自然・歴史・環境・食文化などを調査・研究分野としている参画型学習事業では必要不可欠といえよう。

参画型学習事業の開設期間は、前年度の3月末で募集を終了して、新年度の4月からスタートし来年度の3月末で終了できるようにする必要がある。

(2)学習プログラムに関する提言

①単年度3学期制の導入

今回の創造講座では、従前の専攻科と同様に、単年度3学期制とした。ただし、この創造講座での3学期制は、開催時期を5月中旬にしたことや班別活動の増加など計28回(前年度の専攻科は18回)の学習プログラムとなった。その結果、班別活動は、受講生や班長からも好評であった。

これらのことから、参画型学習事業は、単年度で系統的な学習が可能な3学期制とし、できるだけ早期に開催できるようにすることが必要といえよう。

②学習プログラムの厳選と参画・体験型方法の導入

今回の創造講座や従来の専攻科での調査結果から、受講生全員が受講する学習内容としては、開設の目的の理解と

班活動に資する分野が求められていることが理解できた。

これらのことから、参画型学習事業における学習内容や方法については、以下のような配慮が必要といえる。学習方法については、全員の受講生が参画できるワークショップやコンセンサス法など参画・体験型方法を取り入れることが大切である。さらに、受講生の興味・関心や学習の深度などに応じた受講生本位の呼吸する学習プログラムの導入も肝要といえよう。

ア.生涯学習と“まち”づくり,美しい心と行動規範を必修

ユネスコの生涯教育や我が国の生涯学習社会についての理解を深める。また、東日本大震災で顕在化された日本人の美しい心と相手の立場に立った行動規範を再学習する機会を設定する必要がある。そして、人生経験や様々な学習の場で学んで得た知識・技術と知恵など生かして自発的に行う生涯学習による“まち”づくりボランティアの意義や実践方法などについて、先導的な事例を参考にしながら理解を深められるような配慮が肝要といえる。

イ.呼吸する学習プログラムの積極的な導入

参画型学習事業では、呼吸する学習プログラムを導入する必要がある。その理由は、継続研究によって、この呼吸するプログラムの導入が学習活動や班別の調査・研究活動で大いに効果を発揮していることを実証できたからである。今回の創造講座でも実践され、受講生の研究テーマに対する興味・関心が高まり理解が深まっている。但し、これらのことを計画する場合には、事前に主催者に相談し了解を得ることが前提といえる。

ウ.班別活動を事前体験できる学習内容・方法の導入

今回、創造講座の受講生には、創造講座開設2回目から6回まで、専攻科修了生で事後活動を行っている6グループから受講時の体験や事後活動の説明と市民を対象に実施しているイベントを体験する機会を設定した。

その結果、受講生と班長からは、「これからの自分たちの活動がよくわかった。」「テーマ設定や現地調査の選定など班の意思決定がスムーズにできた。」などと評価され、この体験学習の導入の狙いが達成できた。

これらのことから、参画型学習事業は、この事業の目的と社会貢献両方の実体験ができるような学習プログラムを導入することが効果的といえる。

(3)班編成と班活動に関する提言

①ゆとりある調査・研究と事後活動が期待できる班の設定

参画型学習事業の班別活動では、全班員が学習活動や意思決定をはじめ、研究テーマの設定や調査・研究活動を協力しあって効果的に行うことが求められている。そして、創

造講座終了後もグループで学習・研究活動を継続し、その成果を多くの市民に提供できることを期待しているのである。

創造講座や専攻科での調査結果からは、参画型学習事業では、受講生が班の主体的な形成者となって仲間意識を高めながら自発的に活動に取り組むことができるよう、班編成と研究テーマづくりの過程に十分な時間を提供する必要性について理解できた。

つまり、参画型学習事業では、受講終了後の継続的な事後活動を前提とし、班員が仲間意識を高めながら研究テーマの調査・研究活動をスムーズにすすめられるよう、柔軟な班編成やゆとりある運営が肝要ということである。

②班の実態に応じた活動回数と所属班の柔軟な設定

参画型学習事業では、班別活動が重要な役割を担っている。そのため、班別活動の回数は、標準回数を例示し、各班の必要に応じて増減できるようにする必要がある。また、最初の班への所属は、仮の班編成とし、各仮班の活動から正式な研究テーマが決定された後に、再度班を選択して受講生が自らの意思によって所属班を決定できる機会を提供することが大切である。

③独自の学習内容・方法を導入できる柔軟な班活動の促進

今回の創造講座の一つの班では、該当年度に計画した全体の学習プログラムにはない内容を学ぶ必要が生じ、新たに学習テーマを設定し講演講師を招いている。

このように、参画型学習事業では、呼吸する学習プログラムの一環として、班員の学習や調査・研究の活動の方向性や内容が変容した場合は、班独自の学習プログラムを加えたり講師・助言者を班が自ら選んだりすることできる柔軟性が必要である。

④好ましい班活動をすすめる班長・副班長の設置

参画型学習事業では、学習者主体の活動を重視することが極めて大切である。その中心となる班活動においては、班員が対等な立場で自発的に調査・研究活動を行う必要がある。

そのため、各班に班長、副班長（各1名）を置くことが必要である。ここでの班長の任務は、班員をまとめながら、好ましい人間関係づくりや調査・研究活動を推進するリーダーシップを発揮することである。また、必要に応じて主催者（職員や主任講師など）と参画型学習事業の企画・運営・評価についての協議を行うことなどである。

⑤事後活動に配慮した体験型学習プログラムの設定

今回の創造講座では、受講終了後も班活動を継続することを期待した。そのため、前述（9の（2）の②のウ）のように、専攻科修了後現在まで活躍している6団体の調査・研究活動の発表や市民対象に企画した講座などに参画するプログラムを導入した。また、各班で実施した調査・

研究の成果を市民に伝えるための自主企画講座を企画し運営と評価を体験するプログラムを設定したのである。

参画型学習事業では、修了生の事後活動への取組が主要な狙いでもあり、重要な評価（アウトカム）指標でもある。

そこで、参画型学習事業の学習プログラムは、事後活動への魅力的な動機付けや組織づくりをはじめ、社会貢献活動の実体験ができるような配慮が必要といえよう。

おわりに

本研究は、従来の研究同様、松戸市の公民館の館長と職員の方々をはじめ、多くの関係者からのご協力をいただいたからすすめられたのである。例えば、公民館では、よりよい参画型学習事業として開設した創造講座の中に、専攻科に関する今までの研究の成果をとりいれていただいた。また、専攻科修了生で組織し現在でも活躍しているグループの代表の方々には、ご多忙中にもかかわらず、快く講師・助言者として参画されただけでなく、聞き取り調査に応じていただいた。さらに、創造講座の受講生と班長の皆様には、アンケート調査や聞き取り調査でのご協力をいただいた。

これらに対し、改めて感謝の意を表する次第である。

今後は、創造講座の検証・評価を確かなものに行うことをはじめ、多くの社会参画型学習事業の調査・研究を行い、具体的な促進策についての研究を更に深めていきたい。

【参考文献】

- ・「生涯学習の成果を幅広く生かす」（生涯学習審議会答申、平成11年6月）
- ・「平成20年度社会教育調査報告書」（文部科学省、平成22年4月）
- ・「新たな『公共』に資する社会教育のあり方に関する調査研究報告書」（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、平成21年3月）
- ・「知の循環型社会と生涯学習」（日本生涯教育学会年報第31号、平成22年11月）
- ・「成人（中高年）の地域への参画を促す学習プログラムの開発に関する調査研究報告書」（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、平成24年3月）
- ・「（平成17年度版～平成24年度版）松戸の教育」（松戸市教育委員会）
- ・「（平成17年度版～平成24年度版）松戸市の社会教育」（松戸市教育委員会）
- ・新井郁男著「学習社会論」（第一法規出版株式会社、昭和57年5月）
- ・マルカム・ノールズ著堀薫夫・三輪健二監訳「成人教育の現代的実践」（鳳書房、2002年2月）